

原井一郎／斉藤日出治／酒井卯作著

国境27度線

「38度線」と言われれば、本書においては奄美に於ける復帰運動が沖繩を見棄てて「抜け駆け」的に実現されたのかという問いを挙げた上で、敗戦後すぐに米軍施政下におかれた奄美では公職追放のような措置がとられず、神社における「断食」や「日の丸掲揚」など戦前回復的な方式で

は、本書においてなぜ奄美における復帰運動が沖繩を見棄てて「抜け駆け」的に実現されたのかという問いを挙げた上で、敗戦後すぐに米軍施政下におかれた奄美では公職追放のような措置がとられず、神社における「断食」や「日の丸掲揚」など戦前回復的な方式で

すぐに浮かび上がった。「陸続き」ならぬ「海続る」。他方、沖繩では大量の奄美人が出稼ぎ的に働いていたものの、復帰した以上はすぐ帰るべきだという声が高まり、奄美の人々の追放、土地所有権の剥奪などがおこなわれた。沖繩と奄美の対立の起点ともいべき「古疋」から目を背けるのではなく、むしろあえて切開することで治癒を願う祈りのような思いが浮かび上がる。

「あどがき」において斉藤は、戦前京都帝国大学により奄美から奪い去られた遺骨の返還を求める運動に原井が従事していることにもふれながら、「奄美の精神文化を破壊するものに対する深い憤り」がその活動を支えていると論ずる。原井が奄美人として沖繩人を見棄てた経緯を自省的に問う倫理性は、それでは「本土」と呼ばれる島々

「あどがき」において斉藤は、戦前京都帝国大学により奄美から奪い去られた遺骨の返還を求める運動に原井が従事していることにもふれながら、「奄美の精神文化を破壊するものに対する深い憤り」がその活動を支えていると論ずる。原井が奄美人として沖繩人を見棄てた経緯を自省的に問う倫理性は、それでは「本土」と呼ばれる島々

奄美「現代史」を活写

分断する権力の働きを問い直す

駒込 武



四六判・254頁・1800円 海風社 978-4-87616-061-7 TEL. 06-6541-1807

「戦後南島の国境変遷」という図にまつた「こころ」になる。鹿児島県から沖繩島のあいだに、形も大きさも美にさまざまな島々がある。そのあいだを、不自然なほどにまっすぐな線がいくつも横切る。30度線は1946年に南西諸島（奄美と沖繩を含む）を日本から切り離して米軍統治下に置いた時の境界線、27度線は1953年の奄美「復帰」後、米国の施政下に置かれ続けた沖繩を隔てた境界線である。この27度線が1972年の沖繩「復帰」までのあいだ国境線となり、奄美と沖繩を分断し続けた。

復帰運動が展開された事実をえぐり出す。復帰したら生活が楽になるだろうという願いがその根底に存在したわけだが、実際には米国によるガリオア資金の返済などのため経済的困窮はますます厳しいものとなり、「むしろ米軍統治の方がよかった」という声も復帰後

原井は本書で折にふれて自らの見聞を組み込み、「書けば縁者に迷惑が及ぶかねない側面もあった」とも記している。そのことに明らかかなように、ここでは原井自身をその一部として含むところの奄美「現代史」が活写されている。同時に、

仕事の重要さをそれぞれの中で表現している。経済学者斉藤は社会科学者の文体で「国境線の政治」とこれに抗する「琉球孤民衆の自決権の闘い」の重要性を浮き彫りにする。民俗学者酒井は、1952年当時国境の島だったトカラ列島・宝島を旅した際に刑事に尋問された経験を語りと語りながら「自分を含めて、本土の人間の大方の人、こうした国境の厳しさを理解していきなさい」という思いを書き留め

★はらうい・いちろう「南海日田」、大島新聞記者に就任。編集長・シャーナリスト。一九四九年生。
★さいとう・ひではる「元・大阪産業大学教授・社会経済学・現代資本主義論。一九四五年生。
★さかい・うさく「民俗学者。南島研究会主宰。一九二五年生。